

語彙と経験その2

2025.4.14

獲得したい語彙量は、小学3年生までに800語、できれば1万語である。ただし、語彙量だけでなく、語彙の中に「かさ（嵩）」や「さかん（盛ん）」など、現代の生活ではあまり使わなくなった和語がたくさん含まれているかが重要である。これには理由がある。

小学校の教科書は、たぶん意識されずに、ある理想的な母語の状態を前提として書かれてある。例えば、小学1、2年生の算数の教科書に「しかたをせつめいしましょう」とか「ますのなかにかきましょう」とか「10のたばでかんがえましょう」という文が登場する。「しかた（仕方）」や「ます（升）」や「たば（束）」という語彙が獲得できていない子どもは、何をすればいいのかわからないだろう。他にも「かさをくらべましょう」や「工業がさかんな地域」のような文も出てくる。「かさ（嵩）」や「さかん（盛ん）」は、最近の家庭ではあまり使わないのではなかろうか。

このように、教科書や先生が無意識に使う言葉、特にやさしいはずだと思って無意識に使う和語を知らないと、子どもたちは困ったことになってしまう。

辞書を使えば、語彙は増やせるのではと思われるかもしれない。だが、基本的な語彙が備わっていないと、そもそも辞書を使いこなすことはできない。三省堂の『例解小学国語辞典（第八版）』を開いてみる。この辞書は、シェアの高い国語辞典である。算数の文章題には「交互」という言葉がよく使われる。「赤玉と白玉を交互に並べる」などである。「交互」の意味がわからないとする。辞書で調べてみると、次のように書いてある。

交互・・・代わる代わる。たがいちがい。例：右と左、交互に手をあげる。

「代わる代わる」も「たがいちがい」も知らない子どもはどうすればよいのか。「たがいちがい」を辞書でひいてみると。

たがいちがい・・・異なる二つのものが、順番に入れかわること。代わる代わる。

また「代わる代わる」が出てきてしまった。難しい言葉をよりやさしい言葉に置き換えることで言葉の意味を文で伝えることが辞書の役割であろう。辞書は、この世界を無理なく表現するために必要な和語を十分身につけている子どもが使って、初めて意味がある書物なのである。

このことを学校の先生や大人は、どのくらい認識しているだろうか。こういった視点から、教科書を読んでみると、子どもたちの困り感に気づくはずである。